女の会通信

内容

- 女たちの明日のために ＝A子さんへの助言＝
- 平和教育の必要性と現状
- 催し報告.
- 催しおしらせ. 本の紹介.
- 編集後記.
- T.D.K.をボイコットしよう。

1982.2.25

女たちの明日のために

――A子さんへの助言――

A子さんは結婚三年、二才の女の子を持つ主婦です。昨年夏頃より夫の朝帰りが続き、その理由を問い直したところ「好きな人がいて付き合っている。文句があるなら離婚するそれがいやなら口出しするな」という答でした。夫はその後も一貫して同じ行動をくりかえし、彼女は別れることが考えられないと悩み続けています。

編集委員会では、「A子さんの場合を女たちはどう考えるのか」ということで話し合いを企画し出席者にレポートを書いていただきました。

〈レポート・I〉　T・Y

「一人になるのが怖い」と彼女は話しの中で何度も語った。相手と別れて子供と二人で生きていくより、まったく彼女の人格を無視されて耐える生活を続けていく方を選ぶのか。更に「二人で居てもちっともおもしろくないけど安らぎを感じる」とも言った。最初は彼女に同情的だったが、終わりの頃にはこれだけの侮辱を受けながら、十年近くも彼の横暴ぶりを容認してきた彼女自身にむしろはがゆさを感じた。

しかし、一方では何故か「一人になるのが怖い」という彼女の言葉が痛い程私の胸をついた。それと同時に悲しくさえなった。

二人の関係性や表われ方はまったく違うが、私自身依りかかって生きているのはまぎれもない事実だからである。前から私にとってもその事が問題だっただけに彼女の言葉は私に強い説得力をもった。どうしてそうなるのかは、私自身が自立できていないの一言につきるだろうけど…!

私は早く両親から独立したかったし、同級生達と比べてしっかりしている方だと思っていたが、一夫と出会ってから違ってきた。恋愛・結婚・出産/と年を経るごとに家庭という枠の中でますますその依存度は高まっていく傾向にある。最近私は、自分自身がうまくやってこれたのは、幼少時は両親の庇護ある家庭・大学時代までは学校(そこで学ばされた価値観や成績評価など)という大きなバックボーンがあったからではないかと思えてきてならない。その枠がすべてはずされる直前に夫と恋愛関係に陥った。その時随分多くの友人との可能性を惜しみもなく自ら捨てさっている。自力で生きなければならない社会に出されて、職場の労働条件があまりにもひどく、世の中が方角に満ち溢れているのに茫然とした。同僚達はほとんどが無関心で、しだいに私も疲れていった。そんな

中で寄り所は愛する人との生活以外にない、他はすべてかすんで見えた。何と言おうと、その時私はまた次のバックボーンである家庭へ夫との愛情へ逃げ込んだのに違いない。そこではもうしのぎを削り合う必要もなく、傷つかずにすんだ。まして夫が良い男であったがためにすこぶる居心地が良く、夫婦という関係に甘えてしまった。そうなると家族関係に頼り、安らぎを得ようという発想をしてしまう。長い間、限られた人と空間で生きていくうちに、思考も感覚も縛られていったのだろうか？　特に日本では家族という関係ですべてが片付けられる風潮がある。しかし家族は他人と他人との関係であり、原則的に個々の家族員が作り上げていくものであって、ホームドラマ御自慢の肉親の情とかいう甘えや情けで塗り込まれた既成のものでは決してないはずだ。私も彼女も彼女の夫もその上に胡坐をかいていたのではないか。彼女もそのことに気づいているだろうし、子供もいつかは見抜いてしまうだろうと百も承知のくせに、彼女は目をつぶろうとしているかのように見えてならない。

所詮人間生まれるも死ぬも一人――。私も子供を産んだことによって一人で生きることが初めてわかろうとしている。一人ということをはっきり自分に確認できた時、今までと違った人との関係性を見出せると確心している。彼女は現在二人で生きているつもりだろうが思い込みにすぎない。そこには一人で感じる孤独感よりずっと悲愴な安堵しかないのじゃないかしら。私も早く自己からの自立をしなくてはと思った。

ヘレポートⅡレ　　冊越　紀子

二月十日、編集委員会の呼びかけで、A子さんの置かれている現状について詳しい話を聞く機会がもたれました。今まで、断片的には聞いていたのですが、あらためて詳しく聞いて、あまりの悲惨な実情にしばらくは言葉もありませんでした。

それは、彼女の配偶者である男のことなのです――が、自分の思うがまま、欲望のままに生きてゆきたいと言い、彼女との離婚を望んでいるとのことなのです。その言葉のとおり、今まで多くの女達との関係をもち、そのことを責める彼女には暴力を加えるのはもちろんのこと、「女はバカだ!!」と罵り、彼女を人格的にも貶める言動も絶えないのです。ですから、彼女との共同生活もほとんどないに等しく、朝はコーヒーを飲むぐらいで家を出て行き、夜は毎晩2時から3時頃に酔っぱらって帰ってくるといった生活のようでした。男のこのような言動は、彼女と知り合った頃からその兆しはあったらしいのですが、医師という、まわりからもちあげられる職業に就いてから、それに輪を

かけたようになったとのことです。
私は彼女から詳しく話しをきいて、もうこの男の生き方を変えるという作業は無理なように思いました。彼女との共同生活を建てなおすことも絶望だろうと判断しました。共同生活において二人が対等な立場にたち、尊厳をもちあうというのは、守らなければならない最低のルールですが、この男は、もうそれを一方的に破り、しかも、もっと悪いことには、そのことについて何の努力をはらう気持ももち合わせていないことです。この男にとって、女と生活するということは、自分が快適に暮らせるように女を使うのみで、それ以上の人間的なふれあいなどは必要ともしないものなのでしょう。
私は、彼女もここまで尊厳を貶められ、侮辱されていることであるので、当然怒りを感じ、離婚を考えているであろうと思っていました。しかし彼女の言動には怒りはなく、深いあきらめの淵に沈んでいるようでしたし、また離婚は「一人になるのが恐い！」という不安感によりなかなか踏み切れないとのことでした。こんなに身勝手で横暴な男でも、名目上でもいる方が一人になるよりはましではないのか……というのが正直な彼女の気持なのでしょう。
私は、彼女の不安な気持：それには多分に思い込みがあると思います：が全くわからなくはありません。しかし、女がそんなに甘やかすから男はますます増長するのではないか！女がそんなに下手に出るから男はますます傲慢になるのではないか！という気持の方がより強いのです。この問題は彼女と男の問題として浮かびあがっているけれど、本当のところは女と男の普遍的な問題としてとらえるべきだと思います。自己の尊厳を貶められてもそのことに怒りさえ覚えなくなった女の感性の鈍化と、女の人格を踏みにじっても心の痛みを感じない男の感性の鈍化の中で、女と男の間にはエロスの香りもなくなり、ただその上を生活が流れていってる……私は今の女と男の間がそのように思えて仕方がないのです。

この原稿を書いていて、話を聞かせてくれた夜のA子さんの顔が思い出されます。とっても疲れていて、無表情な……。彼女はまだ混乱の中にいて結論を出すのに時間がかかるでしょう。でも私は、つらいだろうけど、もっと自分の誇りというものを大切にして、堂々と顔をあげて生きていってほしいのです。あんがい一人で歩き出すと、今まで見えなかったものが見え、感じられなかったものが感じられる、新しい世界が開けるのではないかという気持もあるのです。

〈レポートⅢ〉　A・K

世間なみの結婚という形態をとった男と女の関係が破局か存続かの岐路に立たされている友人から直接話を聞いて感じたことは、彼と彼女の生きざまの違いを見せつけられ、女の地位向上、自立と騒いでるけど現実には余り進歩がないなァと思った。

私は彼との面識は全然ありませんので、彼女や彼女をとりまく友人を通しての彼しか想像できませんが、彼は己れに自信と誇りを持っており、自己中心的な生き方をしているのに対し、彼女は生活全般、精神的構造まで彼を中心に据えている。

彼は彼女の全人格を否定し、けなげなまでに献身的な彼女に屈辱的な言動を浴びせているのに、彼女は彼に必死に縋りつこうとしているのがこの夫婦の現状である。彼は好きな女ができたら、その女と一緒になりたいと公言し、現実にそのような動きもあったらしい。今後も好きな女ができる可能性もあるようです。このような彼の言動は彼本来のものではなく別のところから出たもので、あわよくば彼が変化することで彼との関係がよくなるのではないかとか、又は彼女が彼の期待する女に変わることで「ますます自分を殺して生きることになるのだが」彼との関係がよくなるのではないかと彼に期待している彼女をみて、アーまだ彼と別れられないなと直感した。彼に未練がある彼女も時には別れを考えるらしく、一人になったまま一生を終えることが恐いと言ったけれど、私も別れを決意する過程で同じような悩みを持った経験があります。

当時の私は20代後半で性差別意識はおろか、労働者としての権利意識さえ持ち得てなく、何の取り柄もないくせにプライドだけは高い女でした。私は働き続けていましたので経済力はありました。何が不安だったかと言うと、子供を二人抱えて夜勤に出ること、そして子持ち女を相手にする男はいないだろう、20代から男なしの寂しい人生を送るのかと思うと不安でした。男を無くす不安とは、要するに男と寝ることが断たれる不安でした。

よく子供を引き合いに別れられないと言うのを聞くし、彼女も子供のためにも悪影響があると言ったが、子供を楯にとるのはよくないと思う。不安定な家族環境の中で教育することより、片親だけで堂々と自信を持って教育することが子供にとって好ましいことです。子供は女が養育するのが当然のような風潮がありますが、女が家を出て自立するには子供は非常に足かせになることは事実だし、大きな解決すべき問題の一つです。

人間は一人で生きられません、いろんな人間関係の絡み合いの中で生きています。夫婦も独立し

た男と女の人間関係の一つで自分の人生をより快適にするための手段に過ぎないと思う。男と女の関係でも快適要因より不快要因が多くなると、何らかの方法をとらないとますます苦痛は増すばかりです。

私の周囲に自分の夫ほど悪い男はいないみたいな愚痴をこぼしながらいつまでも夫婦関係を続ける友人を見て腹が立ったのを思い出しました。最初はこの友人に同情しましたが、いつまでも同じ状態でぐじぐじしているのを見ると、逆に女も結局は男と同じじゃないかと思え、この夫婦はこのままで一生を終るのじゃないかと思ったことがありましたが、最近の情報によると数年前ダンナは亡くなったとか。

今苦しんでいる彼女に望むことは、人生は自分のためにあるんだと居直って欲しい。

彼は彼女のように彼に頼り切った弱々しい女「微温湯にふやけた女」でなく、活気に満ちた女を求めてるような気がしてなりません。彼女が自己をとり戻し彼女中心の人生を送るようになると彼の目も変わるのではないでしょうか。彼女にとって彼女中心の生活を送るということは彼と対等になることだと思う。前に書いた彼の期待する女に変わること、つまり彼にベタベタ甘える女とは彼の考える甘える女と、彼女の考える甘える女とは相違があるような気がします。彼の考える甘える女とは彼が心配になる女、自己主張のある女だと思うんですが……。

彼女が彼と対等に自己主張するようになっても彼が変わらなければ、彼はそれだけの人間だと思い本気で別れを考えて欲しい。

彼を無視するように私は発言しましたが、自分をとりもどさなければ彼を無視できません。もし本気で別れるとなれば一人で暮らす恐さはありません。男だって沢山いるし、子供もしっかりしてくるし、友人とも彼の影におびえることなく交際できるし、ぐじぐじ、めそめそしてるより案外楽しい快適要因の中で人生が送れること請け合います。

❀出産体験記❀ を募集します（四百字詰四枚）

出産を中心に、それに関連したこと、感じたこと、今度はこうしたい等。

・〆切　三月三十一日

・送り先　長崎市深堀町

M T（　　）

年令、子供数、出産場所、出産時年令を必ず明記のこと。原稿は編集して「女のからだ」分科会で発行。名前は頭文字で出します。

平和教育の必要性と現状

K・T

昨年、八月九日の平和宣言で長崎の本島市長は「特に教育者のみなさんにお願いしたい。核兵器をなくし、完全軍縮の実現こそが、人類が未来に生き残る唯一の道であることを、子供たちに、すべてに優先して教えて欲しい。平和こそ、私たちが子孫に残すただ一つの遺産なのです」と訴えました。

しかし、一九七八年に長崎市教育委員会が発行した「平和に関する指導資料（試案）」のなかでは、平和に関する教育（平和教育ということばは使っていない）の重要性を許えながらも、①いわゆる「原爆を原点とする」ものではないこと、②平和に関する資質を啓発するものであること（すなわち、関接的平和教育を強調）、③いわゆる特設時間を設定して行なうものでないことを三原則としてうち出しています。

平和教育の必要性を否定することはできないが、積極的におし進めようというのではない市教委の姿勢がうかがわれます。そして、原爆を原点にしないということが、あたかも原爆を教えてはならないかのように、平和教育に対しての妨害が繰り返されています。学校図書館から原爆読本が持ち去られたり、八・九平和集会で「原爆を許すまじ」を歌ってはいけないといったり、平和カレンダーが教室から強制撤去されたり：八月九日が日曜日だからという理由で子どもたちを登校させるのを認めなかったり、毎年、毎年トラブルを生じています。

「全国的な状況はどうでしょうか。」

一九八〇年六月の衆・参同時選挙で安定多数を獲得した政府・自民党は、勝兵連合、生長の家、郷友連盟など、右翼改憲勢力と一体となって、「日本を守る国民会議」を都道府県に組織し、全国的な改憲運動に取り組んでいます。改憲を先取りした軍国化の動きも増々露骨になり、有事法の法制化、徴兵制、徴用制の復活、自衛隊の海外派兵、核武装、武器輸出禁止の解除など、実質的な改憲政策が公然と口に出されてきています。また、靖国神社の国家護持、戦没者追悼の日制定、日の丸・君が代の強制、教科書検定の強化など、教育やマスコミへの介入と干渉、国民の思想統制が相次いでうち出され、教育、文化のうえにもさまざまな影響を与えています。さらに、昨年八月十四日に出された「防衛白書」では、国家を防衛する愛国心の必要性が随所で強調され、「真の愛国心は単に平和を愛し、国を愛するということだけではない。国家の危急に際し、力を合せて国を守るという熱意となって現われるものである」と表現す

るまでにいたっています。こうした中で、青年たちの政治的無関心と自己中心主義、保守化傾向をうみだしています。

一九六〇年以降の経済目的にあった能力開発は学歴社会や受験競争をうみ、人間の尊厳や人権の尊重を否定するような行為に陥る子どもたちがふえてきています。学力の低下、非行、とくに暴力登校拒否、自殺、生きぬく気力の喪失、社会への無関心など、深刻な事態が発生して、まさに、日本の平和、民主々義、そして教育の重大な危機に立たされているといえます。

だからこそ、平和教育が現代教育の重要な課題をになうものとして要求されます。

今日まで取り組まれている平和教育の具体的な目標として、次の三点が明らかにされてきました。①戦争のもつ非人間性、残虐性を知らせ、戦争への怒りと憎しみの感情を育てるとともに、平和の尊さと生命の尊厳を理解させる。②戦争の原因を追求し、戦争を引きおこす力とその本質を科学的に認識させる。③戦争を防止し、平和を守り築く力とその展望を明らかにする。この三つの目標は感性的な認識、知的な認識、実践的な認識といいかえることができます。また、この三つの目標は相互に不可分の関係にあり、学校、家庭、社会が一体となって取り組めるように、合意をつくりだしていくことも重要な課題になります。

さらに、国際的な課題として軍縮教育の重要性が提起されています。この軍縮教育については、まだ国際的にも、歴史的にも定型化されたものではありませんが、とくに核時代、核戦争による人類絶滅の可能性を示した「ひろしま・ながさき」を正しく教えることは重要な意味をもつものと思います。

強いアメリカを主張するレーガンの登場と、とどまるところを知らない核軍拡競争に人類の危機を感じたヨーロッパ、アメリカでは昨年秋以降、反戦、反核の運動が炎のように燃えひろがり、各国政府に大きな影響を与えはじめています。国内でも、今年六月の第二回国連軍縮総会へ向けての「核兵器完全禁止と軍縮を要請する国民署名」や集会などが予定されています。このような、平和を創りだすための行動について教えていくことも軍縮教育の重要な一部となるものです。自らの平和への行動と切りはなしたところでは平和教育は成立し得ないものと考えます。

K・Tさんは、平和教育に全力で取り組んでおられる教師。古賀小学校勤務。先日の平和集会では「私の平和教育」という報告を出されました。次号通信から連載で「平和教育実践レポート」を引き受けていただきました。乞御期待!!

＝二・七憲法改悪阻止・平和を守る婦人の長崎県集会＝開かる！

主催・平和を守る長崎県婦人共闘会議

午前十時より集会が始まり、約四百名の女たちが参加しました。佐世保市議の篠崎早子氏による「平和と婦人」と題しての講演があり、午後からは、会場の自治会館から湊公園までのデモがありました。

現在自民党は、全国各地で「日本を守る国民会議」を組織し、着々と国民総動員体制をつくりあげようとしています。そして国の予算は、福祉を切り捨て、軍備費を急増大させ、軍国化への道へと歩み出そうとしています。篠崎さんは、太平洋戦争へと日本が進んでいく中で、女たちが戦争反対の声をあげることができなかった現実をみつめ今、私たち女が、ひとりでも多く戦争に反対する声を出すことのたいせつさを話されました。他人まかせの政治、他人まかせの平和、他人まかせの戦争反対……これらのことが、いつか自分のところへしっぺ返しして回ってくることのないようにきょうから戦争反対につながる何かを！

女たちだけのデモ、シュプレヒコール、げっこう迫力がありました。

（報告・K）

平和教育研究集会開かる！

去る二月十一日、日教組九州地区協議会と長崎県教職員組合の主催で「2・11平和教育研究集会」が県勤労福祉会館で開かれた。

この中で毎日新聞論説委員、高榎堯（たかぎ・たかし）氏が「核と平和」と題して記念講演。満員の講堂は、中には居眠りする人もいたが、講師のとつとつとした語り口ながら聞き流してはならない重大な内容にいちいち頷く人、メモする人、テープにとる人の姿もみられた。

話しの中で高榎氏は、ヨーロッパの或る本の表紙に描かれた、四分前を指している時計を示して「この時計の針は、核戦争で人類がセボまでにも四分しかないことを表わしている」ことを説明。昨年秋から急激に高まったヨーロッパの反核運動は、米ソ対立の中で核の配備されたヨーロッパが限定核戦争の戦場になるのではないかという危機感から起こったものである。学生、反公害、反原発、婦人等が反核という点で合流し、あのように大きな動きになったということだ。核シェルター（避難壕）付きマンションが売られているアメリカでも、軍事専門家、医者グループ等が反核の意志を表明している。平和への道は核管理ではなく核廃絶にしかない。しのびよる危機を鋭く察知

し反核の意思を表明し続けよう。「西歴二千年を完全全面軍縮の年にしたい」としめくくり、満場の拍手のうちに終わった。（報告・○○）

お知らせ　講演会

「原子力発電を考える」　長崎2月26日(6:30～)
勤労福祉会館（女の会）
講師　平井孝治さん　大村2月27日(1:15～)
（九大工学部助手）　福祉センター大会議室
（県職組大村支部婦人部）

お知らせ　ひとり芝居

砂田　明さん（昨年七月、長崎で公演）
「海よ、母よ、こどもらよ」と題して、水俣に乙女塚をたてるために、全国をまわり「乙女塚勧進興行」を行ない、水俣のことをひとり芝居で表現。

お知らせ　公開審理

学級通信トンネル事件公開審理（第11回）
四月十九日午後一時三十分より
（場所未定）

四月中旬　佐世保・大村・島原・長崎で
問い合わせ　銀屋町教会　二三一〇六六七

本の紹介

「吉里吉里人」　井上ひさし　新潮社　¥1,900

一九七一年六月上旬のある朝、吉里吉里村は日本国から独立した。たまたまこの時刻ここを通り合わせた「十和田三号」の乗客、ドジな三文文士「古橋健二」が、そのドジな行動によって吉里吉里独立の鎮圧を招いてしまうまでの三日間がストーリーの全てである。その他愛なさと数々の社会風刺に作者の言い分が込められて軽い読みものにもかかわらず内容は重い。

何といっても、自衛隊を前にしたゴンタザエモン沼袋老人の防衛論議、パワフルタローとの医療論争は、主客転倒した現実に不満とあせりを持つ私たちに代わって痛烈な切り込みを入れる。

「それは理想論だ」と切り捨てさせない迫力は作者の木目細かさと、真面目さ故。

登場する女性の役割について不満は残るが、しかし、自分たちの社会を、自分たちの側から組み立てようとする立場を大いに評価したい。

吉里吉里語（ズーズー弁）の面白さと独特のユーモアでとても楽しい本です。

禁煙室

▨一月から何回も編集委員会を重ね、堂々巡りをしていたが、メ切ぎりぎりになって何とか形をなしてきた。一に体力、二に体力、プラスひらめき。マイナス要素の多い私も今回はまともにつきあった感じ。感想を聞きたいなー。（O・M）

▨「女たちの明日のために」の企画では、討論をテープにとって、それをまとめる予定でしたが、どうまとめたらいいのか整理つかず、結局、参加いただいた人に原稿依頼してしまいました。今後は充分気をつけたい。ごめんなさい。（K・Y）

▨通信発行は一ト月おきになったのに、なかなかペースにのらず苦しみました。内容は多いのに焦点を定めるのは難しい。『見ばえよく』を合言葉に努力々々。努力の跡みえますでしょうか。（O・K）

▨今年オ一号の「女の会通信」の発行です。昨年暮れから今年発行間際まで再三の編集会議がひらかれ通信の方針などがハナヤカに展開されました。より充実したものをねがって……。通信購読者と、投稿を心よりお待ちしています。（Y・Y）

TDKをボイコットしよう。

ビデオテープでなじみのTDKは、アメリカ核戦略の新兵器「ステルスへ見えない戦闘爆撃機」開発に協力する旨表明した。社長談が新聞に出ていた。『米国とは仲良くしないといけないしね。軍用は採算もいいはずだし。共同開発やりたいね。』

TDKが開発した高性能フェライトは、電波を吸収して熱に変える性質があり、これを戦闘機に塗ればレーダーに捕えられることがなくなる、つまり見えない戦闘機となる。すでに日本の防衛庁は、戦車の雲隠れ研究をTDKに委託している。この技術が完成すると、中性子爆弾の開発と並んで最新式の核戦略の要となる。

日米軍事協力、飛躍的軍備強化のささえ手TDKをボイコットしよう。

（長岡）

発行者　長崎市中園町4-17（山田善子気付）
「女の会通信」編集委員会
TEL 44-8842
1982・2・25